兄妹

鈴蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
兄妹

【Ｎコード】
Ｎ８２９９Ｚ

【作者名】
鈴蘭

【あらすじ】
「ほんとうのこころ」の続編です。蘭が小さくなって新一が子供のお世話の仕方を学ぶという感じの作品です。一部、新蘭、平和、快青になっています。どんな方でも楽しめると思いますので…。※これは続編ですので、先に「ほんとうのこころ」を読んだほうがいいと思います。

工藤蓮華（前書き）

続編ですので、ちょっと変なところがあると思います。

工藤蓮華

「お兄ちゃん、私の学校は？」
「確か…帝丹小学校だったな…おれの母校だな。」
「お兄ちゃん、料理できないでしょ？また、作ってあげる。」
「へいへい。」
「はいは一回ときちんとすること。」
「すみません」
「よろしい」
小学二年生の少女と高校二年生の青年。
ここ、工藤邸ではこんな会話があった。
そこに、茶髪の高校2年生の女子が勝手に入ってきた。
「工藤君、妹さんの名前だけど…」
「蘭、だろ？」
「ちがうわ。一ヶ月間の間だけ、違う名前にしてほしいの。」
「なんでだ？」
「仕方ないわ。とにかく、この世に工藤蘭は存在しないということで、工藤…そうね、なんて名前がいいかしら？」
「おい、蘭。なんて名前がいい？」
「そうねぇ…蓮華がいいな。」
「蓮華…か。いいぞ。」
「お兄ちゃんは新一でいいの？」
「あぁ、そうだよな？」
「えぇ、もちろんよ。」
三人の会話は冷めているのかあきれているのか分からないような会話だった。

「あと、毛利蘭っていう人がいるんだけど、その人はあなたの恋人よ。でも、少しの間だけ、この日本にはいないのよ。だからもし、誰かに蘭のこと聞かれたら今はいないって言ってね。」
「あぁ、わかった。」
「あと、蓮華ちゃん、工藤君が何か変なことでも言ったら厳しく叱ってあげて頂戴。」
「はーい！」
蘭、いや蓮華がかわいい声をあげて言う。
その声に新一はやさしいほほ笑みを蓮華に向けた。
「それと、園子と和葉さん、服部君、黒羽君、青子さんにも言っておくから。それじゃぁね、蓮華ちゃん、工藤君。」
「バイバーイ！」
「じゃぁな。」
新一と蓮華が志保を見送ると、志保は大きな音を立ててドアを閉めた。

「蓮華、朝飯。」
「何よ、偉そうに。」
2人はこんな会話をしながら蓮華はキッチンへ、新一はソファーへ行き、本を読み始めた。

そんな静かな時だった。

「らぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁん！！！！！！！！！！！！」

大きな長い声が工藤邸に響き渡った。
そして
ドタバタと大きな音の足音がリビングに向かってくる。

「へ？」
「は？」
リビングにいる新一とキッチンにいる蓮華が2人して驚いたようなまぬけな声を出した。

バタンッ

またしても大きな音がロビングのドアを開けた。
「し、新一君！蘭は！？」
「えっと、蘭は…」
志保の言葉を思い出す。
しかし、園子には事情を話すと言っていたので、本当のことを言ってもいいと思ったのか、蘭が蓮華になったことをすべて話した。

「それで？蘭、蓮華ちゃんはどこにいるわけ！？」
「キッチン。もしかしたら、おまえの記憶、ねえかもな。」
「蘭！蘭！！！」
新一の言葉を聞いたのか、園子は急いでキッチンへと向かった。
迷いもせず向かったキッチン。
そこには、かわいらしい小さい頃の蘭がいた。

「蘭…」
「…園子…」

「蘭…呼び捨てに…」
「お姉ちゃん…？」
「ガクッ…」
呼び捨てで呼んでくれなかった蘭に園子はガクッと項垂れた。

「園子お姉ちゃん、どうしてここに？」
「蓮華…ちゃん、あなたは、工藤蘭…ね？」

「そう・・・だよ？」
「なら、あなたは蘭でいいのね？」
「どうしたのさ、みんなで。」
「いいの、いいの。こっちの話。」
「おかしいね、そこに隠れてるんでしょ？和葉お姉ちゃん、平次お兄ちゃん、青子お姉ちゃん、快斗お姉ちゃん…じゃなくてお兄ちゃん。」
蘭がキッチンの柱に隠れてる四人を呼んだ。
そして、見事に四人いた。
「あのなぁ、蘭ちゃん、俺は、お姉ちゃんじゃないぞ？お兄ちゃんだ。」
「だって、いつもお姉さんのカッコして私やお兄ちゃんに会いに来るじゃない。」
完全に子供の蘭。
女子群は可愛いと思い、男子群は項垂れている奴もいれば感心している奴もいた。
「蘭ちゃん、ほんま可愛えなぁ！」
「ほんとほんと！青子と大違い。」
2人は嬉しそうに見ていたが、園子は怒りに震えていた。

「たしかさぁ、これ作ったの志保だったよね？」
怖い声を出して窓から見える阿笠邸を睨む。
その様子に蘭はビクッと肩を震わせた。
「志保お姉ちゃんが…どうかしたの？」
「あなたの体を…！！！」
園子の説明を後ろにいた志保が口を手で覆った。
「園子、私を憎んでるみたいね。」
「はたりまへでひょ！ひゃんをひいはくひはんはから！」
（正しくは「当たり前でしょ！蘭を小さくしたんだから！」です）
「何言ってるのよ…」
志保はあきれ半分で園子を離した。
園子は息切れしたらしく、息が荒かった。
「志保、私を殺す気！？」
「そうね、そのほうがよかったかもね。」
「志保ぉぉぉ！？」
「冗談よ。」
冗談とは見えないそぶりで蓮華に近づく志保。
「蓮華ちゃん、阿笠邸に来てくれるかしら？」
「阿笠博士、いる？」
「もちろんよ、そのために呼んだんだから。」
「おい、何の騒ぎ…はぁ！？」
新一がやっとキッチンに来たが、志保、園子、平次、和葉、快斗、青子が勝手に入っているということで新一は驚きと怒りを隠せない様子だった。
「お前ら…勝手に…」
「ええやんけ、俺ら親友やろ？」
「新一、そうやって怒るから私が嫌いになるのよ！（蘭の声）」
快斗が蘭の声を使ってしゃべったことにより、新一の頭にある火山は噴火した。

数時間の男の悲鳴が工藤邸に響き渡る…

工藤蓮華（後書き）

誤字脱字、教えてください。
感想待ってます。

帝丹小学校にて

「はーい、みんな、今日から新しいお友達が来てくれます。女の子です。」
小林先生はそういうなり、黒板に「工藤蓮華」と書いた。
工藤蓮華と読めない人のために「くどう　れんげ」と隣に書いた。
「はーい、入ってきていいわよ！」
先生が教室のドアに向かって話しかける。
転校生、工藤蓮華は小さな手でドアを開けて、コツコツとはいってきた。
「ク、工藤蓮華です。よ、よろしくお願いします。」
「よ、よろしくー！」
男子たちは顔を赤くして一斉に言った。
なにせ、蘭が小さい頃ですからとてもかわいいのである。

女子の半分が「よろしくー！」と言っていたが、もう半分のほうは嫌味のような目つきで蓮華を見つめていた。
「なんかさぁ、かわい子ぶってない？」
「うんうん」
「江戸川君さえいてくれればなぁ…」
「そうそう。江戸川君がいなくなってからさぁ、私たち相当変わったよね？」
「そういえば、少年探偵団・・・とかいったっけ？」
「あぁ、あの人たちね。」
グループの人が一斉に元太、歩美、光彦を見る。
視線を感じたのか、歩美がそのグループのほうへ目を向けた。
しかし、そのグループはフンッとそっぽを向いた。
「江戸川君にもう一度会いたい…」
「えぇ」

グループはそんな会話をして授業に取り組んでいった。

休み時間になると、蓮華の周りは男子でいっぱいだった。
「ねぇ、好きな色は！？」
「赤だよ？」
「好きな動物は？」
「たいてい、全部好き。」
「むこうの学校に友達いた？」
「えーっと…いたかな…」

そんな質問攻めに蓮華はサラリと答えていった。

しかし…

「じゃぁさ、蓮華ちゃんに好きなこいた？」
「好きな…人？」

いたような…

いなかったような…

一緒にいたような…

あれ？

思い出せそうなのに…
思い出せない。

そして、お兄ちゃんの顔が浮かんでくる。

どうして…？

「んげちゃん？

蓮華ちゃん！」

ハッ…

気が付いたら目の前にはどこかで見たことあるような顔の子がいた。

「あなたは…」

（ーーちゃん！いこうか。）
（ーーおねえさんはーーお兄さんのこと好き？）
（ーー君のこと好き？）

なんだろ…今の…。

「私の名前は、吉田歩美。あなた、蘭お姉さんに似ているね！」

「確かにそうですね！」
「蘭お姉ちゃん知ってるか？」
「蘭…お姉ちゃん？」

聞いたことある…いいえ。私の本名。

工藤蘭。

「どんな人？」
「毛利蘭と言って、すっごく美人さんなの。」
「新一兄ちゃんの恋人だよ！」
「新一…お兄ちゃんの？」
「そう！蓮華ちゃんが大人になった感じ！」

「そう…なんだ…」
新一お兄ちゃんの恋人さん…

あってみたい…

こうして、私の生活は一週間過ぎて行った。

帝丹小学校にて（後書き）

感想待ってます！

久しぶりの再会

「工藤君、これをのんで。」
志保が新一に薬を渡す。
その薬は名無しのあの薬。
新一はわからないまま志保によって飲まされてしまった。
（うぁ…）
新一は心の中で悲鳴を上げてその場に倒れた。志保はそのまま倒れさせたままにして、新一の様子をうかがっていた。

数時間後

「ン…？」

ここは…どこ…いや…俺の家だ…

蘭は？

「工藤君」
「宮野？」
「蘭のことだけど。」

「蘭に何かあったのか！？
「いい？今からいうことは受け入れることはできないかもね。蘭さんはあなたの妹になったわ！」
「はぁ？蘭は俺の彼女だっつーの！」

この会話で分かっただろうか？

新一は志保が解毒剤を飲ませたおかげで元の正常に戻ったのだ。

「もうすぐ蘭が返ってくるわ。」

数十分後・・・

ガチャッ

「ただいまー！」

なつかしみのある声が工藤邸に響き渡った。

「蘭…？！」

新一は半信半疑のまま玄関へ向かった。

そこには小学生のころの蘭がランドセルをしょって玄関に立っているのだった。

「蘭！？どうして…」

新一は何がどうなっているのかわからず、ただあたわたしているだけだった。

「お兄ちゃん？」

「はぁ？蘭、どうして…」

「どうかしたの？」

新一は言葉を失った。

蘭は新一の妹と勘違いしている。

「工藤君、ちょっと。」

志保は無理やり新一をリビングにつれて今までのことを話した。

「そう…だったのか…」

「工藤君、蘭はあなたのことをお兄さんと思っているわ。これ。」

志保がカプセルを新一に預けた。

「これ…蘭があなたのことを兄とは思う薬の解毒剤。」

「ＡＰＴＸ４８６９のは？」

「一ヵ月で終わるわ。そうね、あなたもＡＰＴＸ４８６９をのんで。

」
「はぁ？」
「蘭一人にさせるの！？」
「いや…」
「なら、ちゃんと飲んでね。」
志保はそういうと工藤邸から出て行った。

「らーん！」

「何？」
「これ、飲んでくれ。」
「どうして？」
「いいから…」

「う、うん…」
蘭は水とともにその薬を飲んだ。

（いや…なんか…いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！）

蘭はその場に倒れ数時間の眠りについた。

数時間後、蘭は目覚めると自分の体に異変を感じた。

高校生のはずがなぜか肌がふんわりしていた。

目の前を見てみるとそこにはコナンがいた。

「こ、コナン君！？」

そんなはずはない。

コナン＝新一
なのだ。

なのに…どうして？

「コナン君…どうして…ていうか、私…」
「蘭、俺たちは小さくなったんだ。」
「解毒剤は？」
「いや、一か月間かかって戻るらしい。」
「よかった。」
「お前は、工藤蓮華。おれは江戸川コナン。」
「じゃぁ、よろしくね、コナン。それと、どうせ、志保が作ったんでしょ？」
「正解。」
新一の言葉に蘭は浅いため息をついてコナンに抱き着いた。

「わっ！」
新一、いやコナンはいきなりのことで驚いた。

「コナン君に会えた・・よかったぁ…」
蘭の目には涙がいっぱいだった。

コナンは優しく蓮華を包んで揚げた。

その後、先ほどのことおを大阪カップル、江古田高校カップル、園子に伝えた。

久しぶりの再会（後書き）

感想待ってます！

江戸川コナン、再登校

「コナン、行こうよ！」
「ったく…よく教科書とか残ってたよな…」
今日から新一は江戸川コナンとして小学一年生として帝丹小学校に通う。

もちろん、蘭も一緒だ。
蘭、蓮華はコナンもいることにより、安心感があった。
「コナン、歩美ちゃんたちに会いたかったんでしょ？」
「まぁ…そうだな…」
コナンは久しぶりに会えるという気持ちでうれしいようないやなような複雑な気持ちになっていた。

帝丹小学校の登下校の道を歩いていると少年探偵団が2人のもとにやってきた。
「蓮華ちゃ…」
「蓮華〜…？」
「蓮華ちゃん…？」
みんな蓮華のほうを向いていたが、蓮華の隣にいる男の子を見た途端、彼らは確信した。

「「「コナン君！（コナン！）（コナン君！）」」」

江戸川コナン、一年前に帝丹小学校に通っていたが、一年後、すぐに姿を消した。
灰原哀とともに…

しかし、歩美が蓮華とコナンが一緒にいるのに目を向ける。
どうやら、蓮華をライバルだと思ったらしい。

「蓮華ちゃん、コナン君と知り合い？」
「え…えーっと…」
「友達…って言ったほうがわかりやすいかな？」
「ふぅーん…いつ出会ったの？」
「へ？あぁ…一週間ぐらい前だったかな？」
嘘
本当はずぅっとまえから。
幼馴染だから１７年間ずっと一緒にいる。
２人は全然違うことを話している。
しかし、それが歩美にとっては好都合だった。

（蓮華ちゃんより…歩美のほうがよくコナン君のこと知ってる。）

そう思った歩美はコナンにいきなり抱きついた。

「コナン君！会いたかったよぉ～！」
二年生になった歩美はこういう計画を立てられるようになった。

コナンが今でも好き。
大好き。
自分を守ってくれる人。
だから…だから…

蓮華には負けられない、そういうおもいが歩美の心を換えて行った。

「お、おい、歩美ちゃん！」
コナンは嫌がっている。
それを見た蓮華が
「歩美ちゃん、コナンが嫌がってるよ？離してあげたら？」
と優しく言った。

『コナン』と『コナン君』

歩美はその違いに気づいてしまった。

たった一週間の付き合いでどうして呼び捨てなのか。

コナンは嫌がってないのか？

そう思った時、歩美はすぐさま泣いてしまった。

「う、ウェぇぇぇん！！」

「あ、歩美ちゃん！？」
「歩美？」
少年探偵団とコナンと蓮華はいきなり泣き出した歩美にあたわたしていた。

「とにかく、落ち着かせよう！」
蓮華はそういうなり、歩美の手を取って学校へ走って行った。

学校に着くと、２人が走っているので見る人はすごく振り返りながら登校していた。

２人は走って保健室へ行くと、保健の先生が優しいまなざしで歩美が泣きやむのを待っていた。

蓮華も同じだった。

蓮華は、体が小さくても心は高校生。

面倒見のいいお姉さんなのだから優しい目をして歩美を見ていた。

「工藤さんったらなんだか高校生に見えるわね…」

「え？」

蓮華はギクッと思いながら一生懸命違うと言っていた。

保健の先生は「はいはい」と優しく言ってくれた。

先生の年代は５０。

おばさんなのでみんなから好かれている。

そんな会話をしているうちに歩美が泣きやんでいった。

すると、歩美はいきなり蓮華の腕を引っ張って

「私…蓮華ちゃんに話があるんです…っすみませんでした…っ」

半ば泣いていたが先生は不安がらずに「わかりました」といった。

歩美が蓮華の腕を引っ張って人気のないところに連れていくと同時にチャイムが鳴った。

蓮華はやばいと思ったが歩美がかまわず話し始めた。

「蓮華ちゃん…歩美はコナン君のこと好き。」

「歩美ちゃん…」

「蓮華ちゃんはどうなの？歩美、蓮華ちゃんのことよく知らないけ

ど、蓮華ちゃんのこと、ライバルだって思う！」
「私も好き…大好き！コナンは私を命がけで守ってくれたし…」
「それだけ？それだけで好きになったの？」
「それだけ…ってわけじゃないけど、コナンの全部が好きだな…」
「え…？知ってるの？コナン君の全部を…」
「さぁ…あいつのことは全部知ってるつもり。」
蓮華はそういうとにっこり笑って歩美の手を引き、教室へと向かった。

（蓮華ちゃんのばか…）

歩美はそう思うと同時に蓮華を階段のところで突き飛ばしていた…

江戸川コナン、再登校（後書き）

感想待ってます。

事件

「キャ・・・」
蓮華は小さな悲鳴を上げた。

それはその場にしか聞こえないような声。

蓮華は気を使った。
本当のところ、大きな声を出しているところだが、大声を出したら
みんなが来てしまって歩美に被害がかかる、そう思うと蓮華は静か
に目を閉じた。

スローモーションのように蓮華は下へ下へと落ちて行った。

「蓮華ちゃんの…せいなんだから…っ」

歩美はそういうなり蓮華をそのままにし、その場を去って行った。

「歩美…ちゃん…ごめん…ね…」

小さくほほ笑むと蓮華は目を閉じたまま意識を失った。

蓮華1人、会談の一番下で倒れていた。

歩美は走って教室へ向かうと歩美の計画は始っていた。
「先生！大変なんです！蓮華ちゃんが…っ蓮華ちゃんが・・・っ」
歩美は演技で大変そうに言った。
「蓮華がどうかしたのか！？」
一番最初にいったのはコナンだった。
歩美はそれに傷ついたがそれを隠して事情をすべてコナンに話した。
コナンは事情を聴くと走って会談へ向かった。

「蓮華！！！」

コナンは蓮華に近づくと頭から血を流している蓮華がいた。

「おい、しっかりしろ！蓮華！」
「…し…新一…？」
「蘭…よかった…今すぐ保健室に行くぞ！？」
「ごめんね…」

コナンは蓮華をおんぶすると走って保健室へ向かった。
保健室では大騒ぎとなった。
「蓮華ちゃん、誰かに突き飛ばされた覚えは？」
「…」
蓮華は答えようとしない。
歩美のせいにすれば歩美が苦しむ。
「私が…勝手に転んでしまっただけなんです…。」
「本当なの？」
「はいっ…そうに違いないです。」
「そう…よかった。」
先生は安心して蓮華の話を聞いていた。
しかし、蓮華は知っていた。
歩美が自分をつき落とし、殺そうとしたことを…

「蓮華！大丈夫か？」
「うん！全然平気！」
蓮華はにっこり笑ってそういった。

捜査開始

しかし、コナンは誰かが蓮華を突き落したのだと確信していた。
たしかにドジっぽい蓮華だが、階段から落ちてもあそこまで大量の血が出ることはない。
病院は行かなくても大丈夫と言っていた蓮華だが、やはり痛そうだ。

（おかしい…）
コナンはそう考えていると一人の少女にぶつかった。

「あ…ごめ……？！」
「あら…」
「灰原？！」
そう、そこには宮野志保のはずの灰原哀が立っていた。
コナンは何が何だか分からなくなって頭が混乱寸前だった。
「ごめんなさいね、驚いたでしょ？」
「驚くも何も、どうして…」
「工藤君、説明はあと。蘭が階段から落ちたんですってね。」
「あ、あぁ…」
コナンは哀の言葉に少し言葉が詰まった。
ほんとうは違う、そういいたかった。

「あら…なんだか違うみたいね。」
哀はわかったようだ。
しかし、コナンは半信半疑のまま哀に自分の意見を話した。
「たぶん…蘭は何者かによって突き落とされたんだ。」

「蘭は…知ってるんでしょ？」
「多分…な。」
「どうしてそれを言わないのかしら？」
「庇ってるんだろ…あいつ、そういうお人よしだからな…」
コナンの言葉に哀は同情した。
確かにそうだ。

蘭は人が苦しむ姿を見たくない。
だからこそ、命を張ってもその人を守り抜く強さがある。
そういう優しさは時に、憎しみを持たせてしまうのである…

「とにかく、蘭に会いに行くわ。確か…蓮華、よね？」
「あぁ、そうだ。」
二人は急いで蘭のいる２－Ｂの教室に向かった。
「蓮華！」
「あ…し…じゃなくて…」
「哀でいいわ！」
「どうして・・・？」
「あなた、階段から落ちたらしいわね。」
「うん…なんかドジっちゃって…」
蓮華はテヘッと頭をこすった。
でも、それは作っていると二人は同時に思う。
蓮華は庇っている。
犯人をかばっている。
そんな時コナンのファンらしき人がコナンに近づいた。

「コナン君！戻ってきてくれたのね！」
「わたしたちのコナン君！」

「キャーーッ！」
コナンファングループがコナンに抱き着いてくる。
しかし、それは蓮華への見せつけ。
コナンと仲が良いことによりそうやっての嫌がらせが蓮華を襲う。

「やめろよっ！！」

考え中だったのか、コナンはいつもよりも不機嫌だった。
しかも、この中に犯人がいるかもしれないというのに…。
しかも、最愛の蓮華、いや蘭が階段から突き落とされたのである。
ジッとしていられないはずだ。

「こ、コナン君…？」
女子たちも当然の驚き。
今までに見せたことのない表情だったからである。
「そりゃそうよ！コナン君は今、考え事してるんだから！」
そういったのは歩美だった。
そういってコナンに自分のほうを向かせようとの作戦。

歩美が蓮華の目の前を通った時、蓮華は悲しみと怖さの複雑な表情を見せたのを哀は見逃さなかった。

「あ！哀ちゃん！会いたかった～！」
歩美はそういうなり哀に抱き着いた。
哀は少し力を込めながら抱きしめてあげた。
蓮華はそれを見ると、そっと教室から出ようとした。
コナンの合図とともに哀は走って蓮華を呼び止めた。

「蓮華、ちょっと話があるわ」
「哀・・・」

蓮華は哀に手を引っ張られ、廊下で話を始めた。

「単刀直入に言うけど、あなた、もしかして吉田さんに突き落とされたんじゃないの？」
「何を…っていうか、どうして私が突き落とされたって知ってるの？」
「突き落とされたの？」
「あ…っ」
蓮華は口走ってしまった。
自分が何者かに突き落とされたということを。
「突き落とされたのね…」
「それよりも、どうして志保が小さく？」
「これは４８時間の薬。二日間この学校にいるつもりよ。それで、久しぶりに学校に立ち寄ったら大騒ぎになってたから先生を呼び止めて聞いてみたってわけ。」
「どうして？どうして小さくなったの？」
「実験よ。４８時間・・・薬が切れるか切れないかっていうね。」
「そう…」
蓮華は少し不安げの顔をして哀を見つめた。
「ん？何？」
「もし、今薬切れちゃったらどうするの？」
「大丈夫、２４時間は確実だから。」
「よかった。」
蓮華は安心感でいっぱいになった。
しかし、どこか複雑である。
やはり、あの階段事件である。

「それで？誰がやったの？」
「・・・言えないよ…」
「言えないってことは友達ね。」
「え…」
「あなたは誰にでも優しくするけど、いうときは言うわ。ただし、知らない人をね。
つまり、クラスメートと考えられるわね。そして…そこからあなたが吉田さんとすれ違った時の表情。吉田さんが関係あるみたいね…」
志保の推理は大当たり特等だった。

蓮華は何も言えずただ、うつむいているだけだった。
志保は痺れを切らし、どうにか吐かせようとした。

「蘭、お願い、あなた…自分を傷つけた人を許せるの！？」
「…」
「…工藤君…許さないわ…あなたを傷つけた犯人(ひと)を…」
「…」
「黙ってないで…本当のこと言って…私はあなたが苦しんでいる姿が一番嫌なの…！お願い…言ってよ、蘭。」

「…新一が…おこるでしょ…？」
「蘭…？」
「新一が…その人のこと許さないでしょ？」
「そうね…そうかもしれないわね…」
「だから言えない！新一が…おこるのが一番嫌！その人がかわいそうだし…新一に余計な心配かけちゃうもん…」
「蘭…」

蓮華の言葉に哀は何も言えることはなかった。

そのまま、犯人の名前は出ることがなく、時は過ぎて行った。

捜査開始（後書き）

感想待ってま～す！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8299z/

兄妹

2011年12月27日19時53分発行